

育児における父親の役割と保健指導に関する研究Ⅱ

— 総括報告 —

総括報告者：川井 尚

研究者：川井 尚¹⁾，庄司 順一¹⁾，恒次 欽也²⁾，横井 茂夫³⁾
若麻績佳樹³⁾，大藪 泰⁴⁾，前田 忠彦⁴⁾，森田 英雄⁵⁾
倉繁 隆信⁵⁾，北添 康弘⁶⁾，奥原 義保⁶⁾，吉田 弘道⁷⁾
David Shwalb⁸⁾，野尻 恵⁹⁾，尾崎真理子¹⁰⁾
安藤 朗子¹¹⁾，甲斐 静江¹²⁾，西林 洋平¹³⁾

要旨

父親の役割を明らかにしその知見を乳幼児健診、保健指導及び継続相談に適用するために本年度は本研究班全体の課題として調査研究を行なった。この調査資料の分析を中心に班員グループ研究の知見をも加え、検討した。その結果、

1. 父親の相談の場としては乳幼児健診が父親のニーズに最も合致していると考えられた。
2. 父親の相談参加の際の主要なテーマは子どもと母親の心と行動に関する領域にあるとした。
3. 父親と子どもとの関わりについて、母親の単なる代行がその役割ではないことを確かめた。父親と子どもの関係に関与する父親自身の要因及び母親との関係を指摘した。
4. 夫婦関係が父親の役割に大きく関与していることを示した。
5. 父親を援助の対象として考える必要があることを指摘した。

見出し語：父親の役割、父親の相談行動、父親相談のテーマ、父親援助

¹⁾ 日本総合愛育研究所・愛育相談所 ²⁾ 愛知教育大学 ³⁾ 都立母子保健院

⁴⁾ 早稲田大学 ⁵⁾ 高知医科大学小児科 ⁶⁾ 高知医科大学情報センター

⁷⁾ こどもの城小児保健部 ⁸⁾ 光陵女子短期大学 ⁹⁾ 桜ヶ丘記念病院

¹⁰⁾ 都立梅ヶ丘病院 ¹¹⁾ 都立教育研究所 ¹²⁾ 東京都三鷹保健所

¹³⁾ 小児科・内科たちばなクリニック

研究目的

本研究班に与えられた課題は、育児における父親の役割を明らかにし、その知見を乳幼児健診の保健指導にいかに関適用するか、その実際の進め方を示すことにある。この目的を遂行するために研究第二年目にあたる本年度は、

1) 研究班全体の課題として、われわれの得たこれまでの知見を整理分析の上調査項目を作成し、その調査研究を行なった。

班員によるグループ研究として、

2) 父親の育児介入の現状に関する研究(森田班員ら)

3) 母親の育児満足感に影響する父親要因等の分析(大藪班員ら)

4) 子どもの発達における父親の役割と父親への援助に関する研究—心理相談の事例研究を通して—(吉田班員ら)を行なった。

ここでは研究1)の調査研究を中心にグループ研究の知見を合せ、特に父親の役割と相談行動に焦点をあてて本研究班の総括報告とする。

研究成果の総括

1. 父親の相談機関への相談行動

子どものことで相談に行く専門家及び相談機関の選択は、①保育所・幼稚園の先生、小児科医、児相・教育相談所、心理カウンセラー、保健所。②相談に行く際の条件としては日曜日、土曜等の開設を望んでいるが、特に条件なしとする父親がいる。吉田班員らの日曜日に相談を開いていると父親の心理相談への参加がよく、そのため子どもの改善効果があることが報告されている。③妻といっしょに相談にいつでもよいとする父親が多い。④育児・子育て教室が

保健所・市町村保健センターで開設されれば妻と共に受講したいとの父親がいる。そして、乳幼児健診にこれまで参加したことのある父親は、単なる送迎を除いて24.8%みられており、母親や小児領域専門家が積極的に働きかければ父親の相談参加は相当程度期待できる。従って、①から④の条件を考えると各領域の専門家による総合乳幼児健診・保健指導の場こそ父親のニーズに合致しているといえるであろう。

2. 父親の相談相手

子どものことで相談する第1の相談相手は妻であり、妻も夫を選び夫婦間での話し合いがもたれている。またもし父母間に育児についての考え方に相違が生じた話し合いで調整しようとしている。しかし、母親と比べ父親は外部の相談相手が少なく父親援助という点からみるとその相談の場の提供が重要であろう。ただし、職場の友人、上司に子どものことで相談をする父親もかなりおり、この傾向がたかまれば、子どもや家庭のためにきちんと休暇がとれ、相談参加が容易になるう。

3. 父親の相談動機

動機として多いものは、子どもの病気や理解しにくい行動を示したときであるが、特記すべきは妻が子育てに悩んでいるときに相談したいとする父親が相当みられることである。母親自身も子育てに悩み相談したいとし、育児に自信のない母親が半数以上に達している。また、父親の求める育児情報も子どもの病気と並んで、心に関するもの育児・しつけについてである。従って子どもの身体的側面と同時に、母親のいわゆる育児不安等子どもの心と行動、即ち母と

子の心の問題が父親相談の主要なテーマといえよう。

4. 相談相手としての父親

母親は父親固有の役割の第1位に自分の相談相手、精神的支持・援助をあげている。このことは吉田班員らの心理相談の事例研究の知見、そして大藪班員らの10か月児の母親の育児満足感とも強い関連をもっていることが示された。即ち、育児満足感と父親が自分の話をきいてくれる、理解してくれる、支えてくれるといったこととの間に結びつきがあるというものである。

そこで既に述べた母親の子育ての悩み、育児への自信のなさをも考慮すると、父親の大きな役割は、母親の時に妻への精神的支持であり、このことが間接的に子どもへの役割を果たすことになるのではと考えられる。

5. 父親の子どもとの関わり

調査資料に示したように乳幼児期を通して父親の家事・育児への参加は相当程度あるといっていよいであろう。そして、父母共に家事・育児の単なる母親代行業は父親の本来の役割とはいえないとの見解も重要な点であろう。

そこで父親の育児参加とは直接的な子どもとの関わりの質の問題として捉える必要がある。さて、積極的に子どもの相手をしようとする父親の比率は低く、このことがまず問題であろう。

ところで積極的に相手をする理由を調べると、子どもに何かを教えたい、心配、好きだからと子どもへの関心によるものである。そして母親は私にいわれているからだというのが、父親は子どもを妻任せにはしてはいけないと自発的・主体

的に関わっており、これは森田班員らの3か月から1才6か月児の父親のデータにも示されている。ここで父親の子どもとの関わり、父子関係においてネックになっている問題を検討しておきたい。積極的に子どもの相手をしない父親の理由は仕事の忙しさ、子ども相手の疲れ等父親側の要因があり、事例研究よりの知見では、「父親が親離れしていない」「依存的」「未熟」等があげられ、父親自身の問題への援助が必要であり、この点については後述したい。もうひとつネックになっているものはおそらく夫婦関係に起因するものと考えられる要因である。

それは、父親は子どもに関心をもっていないと母親が思い込んでいたり、子どものことは私(母親)にしか分からないし、やってやることはできない、父親に育児について口出ししてほしくない等である。一方父親も妻に育児を安心して任せられないと思ったり、妻も夫が育児を任せてくれない等にもみられるもので、調査資料の数値は高くはないが検討すべき問題点であり、このようであれば父親がその役割をとることが難しくなるのは当然である。父子関係の形成と発達は見方をかえれば母子関係へのある程度の介入であり、吉田班員らのいう母子の共生関係を断ち切ることによって母子関係の発達を促進することになる。従って夫婦の関係についての検討は避けて通れない課題と考えられ、項を改めて述べることにしたい。

6. 父親の役割と夫婦関係

本調査研究をはじめとして本年度の諸研究、そしてこれまでの我々の研究知見を検討していくと、父親の役割の中に夫としての役割の比重

が相当あることに気づかされる。既に我々は母子関係と父子関係との差異について次のような指摘をした。即ち母子関係は生物・心理的關係を原点とするのに対し、父子関係は初めから心理・社会的な関係からはじまり、それゆえ母親の介在なしに父親及び父子関係は論じえず、ここに夫婦関係の問題があるとした。前述の相談相手、精神的な支持援助は母親としてということもあろうが妻としてのニュアンスもあって、それが夫への信頼感につながっていることが、大藪班員らの10か月児の母親のデータにも示されている。

夫婦間の気持ちの通じ合いも両者の間に5%のずれで妻の方が通じ合っていないとする比率が高い。吉田班員らの心理相談の事例研究による知見では対象26事例中8例、30%に、子どもの問題発生に夫婦関係の悪さが大きな要因であると考えられている。そしてその結果として父親は妻の支えにならなく、母と子の間に介入できず母子関係を発達させていない。そして、相談過程の中で夫婦関係が変化すると、子どもの改善に効果的であるとの知見を得ている。

従って父親の役割を明らかにしていくためには、父親にして夫であること、母親にして妻であるという2つの役割を同時に考えていくことが必要であろう。

調査資料の中で、重要な役割について順位をつけて選択してもらったところ、夫は第1位に父親、次いで人間、夫、職業、男性であり、妻は第1位母親、人間、妻、女性、職業であった。両者とも第2位人間として、というのは観念的なものではなからうか。

7. 援助の対象としての父親

ここまでの論述はどちらかという子どもや母親の立場に立って父親とその役割を検討してきた。しかし、母親に比べて相談する相手が少ないこと、心身ともに疲れている父親が多いこと等から父親自身の立場に立って父親の役割を考えることも重要であると考えられる。我々はかつて父親が父親としての役割を果たしていくことは子どもや母親そして家庭のためだけではなく、父親自身のためでもあることを指摘した。このことは吉田班員らの事例研究が端的に示している。即ち、前述したように子どもの問題発生に父親の要因が関与しており、援助の対象としての父親の存在を示している。そして、相談を通して父親が変化を示し、父親の役割をとることが、子どもの改善をもたらし、父親は家庭に居場所をつくりえるのである。

従来子ども中心であった乳幼児健診が、現在、母親支援、援助の観点をもつよう変化してきたことと同様に、父親の乳幼児健診参加には、父親への援助という観点をもつことが重要であることを強調したい。

本研究班の研究を総括し報告した。その要点を要約すると次のようである。

1. 父親の選択する専門家、相談機関、そして相談理由から、その相談の場は乳幼児健診と保健指導、及びその継続相談の場が最も妥当であると考えられる。
2. 父親が相談に行く理由、及び母親の役割期待を考えると、相談の主要なテーマは、子どもと母親の心と行動に関する領域である。

3. 父親の子どもとの関わりについて、母親の単なる代行業が父親の役割とはいえない。積極的に子どもと関わる父親は、極めて自発的、主体的である。一方積極的ではない父親の場合、仕事の忙しさ、子ども相手の疲れ、そして、事例研究にあげられた父親自身の問題もあろう。しかし、見落としてはならない点は、夫婦関係に起因するものであり、そこで、

4. 夫婦関係、夫婦間の信頼等、父親・夫と母親・妻との関係が、父親の役割に大きく関与していることが調査研究及び事例研究によって示

された。そして最後に、

5. 援助の対象としての父親を考える必要があることを指摘した。

以上のことから、乳幼児健診や保健指導、継続相談の場において、父親が参加する際、母子の心の領域、及び父親自身の問題、そして夫婦関係と、3つの大きなテーマが浮かび上がってくる。そして、相談の方法について父母合同面接等今後検討すべき重要な課題であると考え

文 献

1. 育児における父親の役割に関する研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 厚生省心身障害研究「高齢化社会を迎えるに当たっての母子保健事業策定に関する研究」(平山宗宏主任研究者)平成元年、2年、3年度研究報告書
2. 川井 尚 育児における父親の役割 小児保健研究51(6):671-680 1992
3. 育児における父親の役割と保健指導に関する研究Ⅰ 厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」(日暮真主任研究者)平成4年度研究報告書



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:7NICU施設における多胎児の入院状況を、1982年、1987年、1992年の3年間について調査して管理状況の変遷を検討した。多胎児の入院比率は年を経る毎にわずかに増加傾向がみられたが、品胎・四胎児は明らかに増加する傾向にあった。多胎母体は不妊治療例が増加し、品胎・四胎児は不妊症治療による妊娠例が多くみられた。多胎児の集中治療期間、入院期間の平均は年を追う毎に増加傾向にある。